魯西亜志

全

ル 8
2969

門 ル 呂 1240 號 巻
門 ル 8 2969 號 巻

魯西亞志

外國叢書

十五

早稻田大學圖書

魯西亜志

桂川甫周國瑞譯

名義

魯西亜ハ往古沙尒馬齊亜(サルモシア)と称せし国なり千餘年前ニスラホニヤ(翁加里亜国乃地なり)ミ三人乃諸侯あり其名をセクスレクスロミスといふコロミイ(翁加里亜国乃地)より分れ出て各王爵乃国を開く即今乃波亦米亜(ボヘミア)(入尒馬泥亜国の地)波羅泥亜(ポロニヤ)魯西亜(ロシヤ)なりロミス乃開きし国なれハ其祖王乃名を以て其国乃名とし又魯西亜(ロシヤ)とそいふなり土俗をロスランド又レウスランドと称す皆魯西亜(ロシヤ)乃轉訛なり或ハ其開国の始

乃ひ国乃名義詳ならすといふ説あれともコロ
ニイより分まりしロニス乃闊き平野国なり故に
其名我以て国名とせしなり称ひ那し
魯西亜国国以来漸くに張大なりて其他人我
三部に分ち各其服色を称して是れを三州
となれり
其一をローデ。ロスランド 赤魯西亜乃義なり といふ波羅泥亜の
一部分乃地にして其説は波羅泥亜の下に載せ
其二をウイツテ。ロスランド 白魯西亜の義なり といふリタウウェン
波羅泥亜国乃地 乃地なり今はスモーレンスコの所属となる故
其三をスワルトロスランド 黒魯西亜乃義なり といふ魯西亜の本国

にて即諳厄斯哥未亜なり但諳厄斯哥未亜の名は何乃
義なる事我詳ならず其都城乃地を諳厄斯哥烏
といへる我らか又其国をも諳厄斯可未亜と称せる
なるならし今此赤白黒乃三州を合せて草す
魯西亜と称するは年暦千七百二十一年 享保六年 に始
て帝號を称せし 伯多禄 ヒイトル といへる帝なり也

幅員

魯西亜乃本国は長さ六百余里其の広さも大抵相
等し近来亜細亜洲乃内なる大韃靼乃北辺を
侵掠し漸くに広大の地を取りて経方といふ其
幅員数倍なる事を知るべし加之近ごろ雪際亜

乃地を併せ得てよりまた其地廣大強盛なるより 世
界にしられど衡をなす處き國なりといふ

海河

欧羅巴(エウロパ)洲乃衆海十名あり 其内五名魯西亜(ロシア)乃境内
にかゝる者を左に挙ぐ
窩々所徳海(オースチドセー)一名伯尓昕客海(バルチヤセー) 雪際亜(スウエーデン)國乃海湾
白海(ウイツテセー) 蠟皮亜(ラツプランド)乃海湾といふ
氷海(エイスセイ) 北極界にあり
星海(スワルテセー) 度尓格の堺にあり
北高海(カスピスセー) 百尓西亜乃堺にあり
右の外大河五あり

尼布尓(デニープル)河一名デニーフル河。リタウウエン 波羅泥亜乃
間にあり 其源はスモーレンスコ乃ほかウヲルコンスキ
乃池澤乃間より發し南に流れ黒海(スワルテゼー)に入る
河口の廣さ四里ばかりその中に多く小島
あり名林木茂盛なり河乃長へ二十里余乃
間に瀑布乃ごとくなる所十三所あれども
皆船にて越ゆる事なし本国と度尓格(トルコ)の間も此
河を渡りて對度合戦ありしことあり
勿尓瓦(ウヲルガ)河 其河源を池澤より出るなり 尼布尓(デブル)河
とおなじ西より東に流れ魯西亜国中を注
ぎ亜私太蠟(アスタラカン)の地より北高(カスピス)海に注ぐ 此

河水甚高く大ニ溢出せる此時ラウエルの地
より貨物を舟ニ積て亜私多蝋(アストラカン)せて運
送す
太乃(ダナイ)河一名ドン河其源をレサン乃地より出て小
灘数多経て迂曲して黒作的湖(メオチセゼー)より
黒海(スワルテゼー)ニ入る此河底浅く多く淤し又甚だ浅
氷乃張る事有て窩尓瓦(ウヲルカ)河ニ於て得し時
ニ大なる船を用ひすして諸物を運送する事あり
杜弁拿(ドウイナ)河其源二つあり是アルカンゲルの地ニ出
二流合集して白海(ウイツテゼー)ニ注く
阿比(オビ)河ハ氷海(エイスゼー)ニ注く其源く底を皆浅し

魯西亜(ロシア)ニ於て第一ノ大河ニ称する此河総括
する所ハ加尓莫哥ベレソウ乃地を過りて此河中に
多く島あり
本国始て帝號を称せし第一世ヒイトル(伯多祿)といひ
し帝我子が湖ラドカ湖の間凡十六七里ばかりを
尾閭ニして相通しむるに我鑿きて河
道我国し商船乃通行ニ便ならしむへ萬
世乃利我開きつかりされて其功徳乃大なる事
ま此河流と共ニ永世ニ傳へて息さる所り
隣界
北ハ雪際(スウエーデン)亜西を波羅沾亜(ボロニア)南を度尓格(トルコ)東ハ大

韃靼と堺を接す近時亜細亜洲乃北方を併
呑せしより支那百爾西亜とも堺を交ゆ

風土

此邦幅員廣大にして数百里に亘り頗なれは
其気候乃寒暖も地乃肥瘠も亦一様ならす
玆に其大較を挙く
西乃方波羅泥亜堺なる地を最も饒なりとす
其米穀出すの地凡二十州穀乃類六十四余
通国乃糧に供するのミならす他に多く近隣乃諸
国に輸す
北方の地ハ気候極めて冷に温盛其常に

しくて地も亦甚卑湿なり多くは茂林池沼の
みにて其間野獣を生し繁し土人多く江河
に漁し又漁猟を事とし牧畜も亦甚少なり
又ウールラスレンチイル マンデルス 白狐 玄狐 サベルス
狐に似て小く其皮斑文極めて美し ヘルメレーチン 鼬の属 等を産し此
獣を以て華を装ひ最も珍重なり其價も頗る
貴し其産所は一方に限らす
ロスマカ一名ヘールフラートと云ふ獣あり其性貪る
食ひ物を食ふ事口に飽つて終に飽
満して挙動する能ハす死する事ある
に至る時は其力をうしなふ入て二本の間にその

身をてさみ食する物をおしくく吐出しては
再ひ食ふするとし此の至しとあり又鶴駝の
海濱に異獣あり其名ベヘモツトといふ其塗毒を
大にしておそ縁しけなり麝芝まれは深の白光
澄まく美くしきこと象牙よりまさるといふ江海
の中魚類も何とも豊なり乾晴して諸方の学
校に送り生徒の食用に充つ但鯨鮒の属奇
まれなり果実の類を何しも滋きのなし 但の
大なるものも重さ三四十斤にも至るものあり
葡萄もまた稀なり ペトル(伯多禄)帝の時レインムーセ
ルの西河邊より移しきたりて諸方に植たり

しつり亜私太蠟甘(アスタラカン)の土地にお存して作り出せしも
味はなお劣れり 生まりも多くは美酒を作り出せ
本国にも植られども蔓行せさるなり
本係蚕絲も最多し 故に種々の織物を製し
て交易の料とす
此邦交易第一の物品は皮革牛皮醃肉牛腊
蠟燭并麻蚕蠟等なり 此を以て異国に交易
をなす

分界

魯西亜の作ち有利歐羅巴(ヨウロハ)亜細亜(アジア)二大洲に
亘る今分て五部とす

第一 インゲルマンランド 禮勿沍亜(レーツランド) 旧雪際亜(シュエーデン)乃地なり 今魯西亜に併せらる

第二 西魯西亜(ウェストロシヤ) 即 本国乃西の方一部分なり 総称なり

第三 東魯西亜(オーストロシヤ) 即 本国の東の方一部分乃総称

第四 魯西亜蝋皮亜(ロシヤラオランド)

第五 魯西亜韃靼(ロシヤタルタリ)

右五部乃内総府を建商去城置所十二所

一 諾勿瓦的亜(ノホゴロド)　二 アルカンゲル　三 謨斯哥烏(モスコウ)

四 ニスノウゴロド　五 スモーレンスコ　六 キウヲウ

七 ビイロゴロト　八 ウヲロ子ス 并アソウ

九 亜私太蝋甘(アストラカン)　十 オレンブルグ　十一 加山(カサン)

十二 止白里(シベリ)

インゲルマンランド インゲリヤ一名インゲルノルランド地なり ヒンランド乃海湾とアドカ湖との間にあり 幅員六十余里地味豊饒ならしく獣畜も又繁殖なり 百五十余年前まで魯西亜の有なりしか 中頃雪際亜(スウェーデン)に従ひ千七百二年(元禄十五年に当る)再ひ魯西亜に併せられ翌年 此地に王城を建起す 伯多禄帝(ペイトル)乃建られし都なれは ペテルスベルクとし名付たり

白海(ベロイモリヤ)ベテルスベルグペートロポリス インケルマンランド
乃大綿なり 千七百三年(元禄十六)にアホステル
ヘートル 創建萬世不朽乃名を垂むとて
ヘトトルベルグと名く魯西亜国第一乃宏麗繁
盛乃地なり 北極より六十度 西へコエイランド
鉄島を離る事 四十八度王城乃廣さ方
二里許 其内に大廈八千餘あり 本城をは子ハ
といふ小河乃内なり 三つ乃島を合せて長めに六稜(不等辺の六角形ろくかく)
に作れり 六乃矢きし 二川の大門あり 第一乃島
をパーロンエイランド(エンテスライ)とゆふ 対岸諸侯地に外
郭を構へ (屋頂に飾ベテル 偶像両手に鍵を持) 大門乃上に伯多禄帝乃

肖像をあらす (門のゆふ黒き對なる鷲の記号あり其下に シントニコラウスの像あり是此国第一の名 大徒乃ハトローン也一乃郭より大なる旗を立つ平日は黒 旗を建黒き對なる鷲の記号あり二つ乃カサマツテに立てり 今は商人のかし て入れ置く所なり)
初は土堤なりしに今は総石垣乃
高さ三丈餘に築きて鉄(くろがね)褐(かつ)銅乃大銃(いしびや)を備へ
列ね城内をも至って廣くし は シントペートル
ハウルスといふ寺あり 宝塔を建起こしれ意太(イタ)
里亜(リヤ)国乃良匠テレニニなるもの造りし所なり
屋瓦を皆金貼にして 塔上より自鳴鐘を掛毎時
に自ら鳴りて時を報し 又自音(きんぐ)の響を奏す 是
和蘭の都 アムステルダム にて造れるなり
其他層楼飛閣 創建美を極め謀く言語乃

多くこれ有なり　此都は代々の帝の廟陵をも
寺院に定め給ひしまゝなり　此都に係て五ヶ寺あり
然るに彼寶塔千七百五十六年宝暦六年に天火
にて過半焼失す　又アホチアルヲスロツといふ有
小川を隔て人家二百斗りあり　国中に学校薬
局を設く　各壮麗を極む　薬局にも毎年諸の
用薬を勿論外国異邦の珍奇の品類までも
備へたり　就中支那の陶器は皆支那の磁器を
用ひ　収納に入用ハ数千のルツプあり
此邑にタルタ人及び文旅館の外旅人の寺
あり　又子八乃支流に湊をなし　此河の内を年

舟を並べて見る所あり　第二の島をアドといふ二
リツ島といふ　五稜に郭を構へ　四方に大銃を
列ね　国を守りし内に宏大なる楼閣を建
並べ　夏日など遊覧する所なり　例えば大
那家園を営む　其内にホレテインといふ氷を盛る
噴水等を設けたり　千七百五十五年宝暦五年に至る
形は多の高殿に楼を造る　悉く画棟彩
梁金碧目を奪ふに実に天下の偉観なり
又馬厩象厩を列ぬ　皆百爾西亜国産の志
を養ふ　嘆息をしむ　又鋳工冶工舟匠冑甲
匠書肆其地有用の百工備はらざるもの無し

又宮居四乃寺又政事を織す所官廳あり
買ひ店も二階ありて造れる交易乃大場なり町乃出
口に武士屋鋪ありて渡梁六百二間第二の盛
所ロミリヨストロウとゆふ街を十二條に分て
往来を通し夏乃内は渡梁（ふね）をもて二島に
渡る渡橋乃長さ六百餘間 伯多祿（ペテル）第二世の帝の
造られたる所にて海に臨みて園をつくりたる宮殿（メン）
ミコフの造る所を建川わたり里ほとりに 江岸より望む風景
絶勝なり海岸に屋を築き夜も書画あり
篝を焚く船海のうち往来しても何へ入るとも目標とす
大庫を造りて貨物を納め 其所に薬局を

建学校を設く文書を広めたる砂糖館
良細工タペイト羅紗伺此地卑湿にして時々洪水
あり西南の風つよき時はラドカより子ハ河へ
落る水俄に吹戻し街道溝水出る高さ人の丈の
見るに堤を築かれたるにせし 千七百五十二年 宝暦
二年洪水あり此地はアレキサンテルネウスコイとて天
主乃寺にてペイトルの遺骨を納む 女帝エリサベ
ツト銀乃棺を造られておさめし寺なり 東国
乃紀号時言ひし伝え勝ちに建てり 西市
の寺にて鷲の旗なり 二所の塔を向ひに建 左右
二寺は翼なり 最此地子ハラドカ 西湖乃間河を

容隠にして大和なる國なし かくまてに食糧も
常に乏く交易に便りもあらさりけるに伯多祿帝
乃現ましく千七百十八年 享保三年 よりこれを設し東
湖の間十二里のあはひを廣さ七丈深さ二丈に
河を穿つ費して凡一十四年を経て千七百
三十二年 享保十七年 女帝アンナの時に至りて其功成
せり開河の丁夫 にんぶ 日ことに二萬四千人其用ゐ
られたり諸物の運送心のまゝになされけれは今は
其地の繁昌富庶なるをいふはかりなしかれ
又諸の詩書も女帝深くをもかしらしまねし
なく萬世その事業の大なる徳澤該けつき

車を行ふの便を新にしたりといふ又ペテル帝此府
よりムスコウまて車乃通ひのたよりに西方に官道
を開く千七百十八年に廣さ東西凡二百十四里の両側
に並木を植ゑ道幅凡十三四間十四町ことに駅あり
ちく毎に館を造りて湿地あるを防く ムスコウまての間
一里毎に八尺の柱を建て駅には馬二十疋を
備へ旅人の用に便にす冬は雪車を用ひてムス
コウまて三昼夜 二十四時 に行くといふ

禮旬泥亜 トイツランド

北はヒンランドの海湾にのぞみ西は窩所徳海 オースデゼー
に際し南はコウルランドに接し東はプレスコウ諾 イ

尓勿入亜に接す南北にして百余里東西六千余里
その地甚だ沃ならず最も穀を得難し故に西
土の諸州北方の穀窖を接す又多く過臘魚
皆鯉椂奐狼熊エランツ麋兎レンヒイル栽を産す畜
産も亦他邦より減らず但羊和ゑ甚下品之
材木は松樅楳ともに多しウヲロチンレ
サンボル

以上三道南方に在り
謨斯可烏の魯西亜の中土にあり其首縣を即ち
謨斯可烏といふムスクワ河邊に在り北極五十
五度三十六分の地にあり千二百年正徳二年の比より皇

魯西亜王の居城にして欧羅巴洲第一の大城なり
周圍十餘里居人凡十五萬其内を四つに分ち
各石垣を築き溝を作りて囲ひ別ちて第一に在
皆宮殿を築き其石垣を築て三層の石垣城楼
を建ならべ溝を掘まして築固めたり其
園囿を設けて墓樹高楼皆五色を以て彩り
多く噴水泉を造りて気色を設けて又六の
寺あり第一をカツテダフールケルリツボルセ
いふ寶塔九座皆鍍金の銅瓦を用ひ門戸
いふも鍍金の鉄柱を用ゆ故に日光に映
じていと光輝燦爛として眼を射る其中の

塔乃銀乃冠を掛く　第二をミントミニールセ
いふ古魯西亜王乃廟所なり　第三をてりや
ヘーメルハールルト聖母昇天諸王后妃乃寺なり是
此一かまへをビンネンスタードといふ内街也
いふ諸なり　人家皆石を以て囲ふ　第二乃構へをキタイゴ
ロドといふ又支那街と称す　罗国に石垣を
く建てあり　圓形方形乃堞楼を樹多
建流し　於屋室は皆美石を以て御承せ
又ムスクワ河に石橋を架けてビンネンスタードへ
往来す　其橋乃製造極めて精巧をなせり
内に寺觀武庫学院書肆薬局を設す　器な

皆玉石等を用ゆ　最華美を尽せりとす交易
乃大鄽に千餘乃肆を連ね支那乃貨物を蔵掛く
なり　支那街とも称せられたるなり
第三をヘロイゴロトといふ又白街とも称す周
圍は白石を以て石垣を造り其長さ
名つけ多く所乃堞乃形ち半月乃如く其の
内に百工商賈備はる　また保を続らし　又木造
其乃木を以て花を造り美を極めたるあり
寺院乃及び銃砲を鋳造する所また旅舎客店等
あり　此街にて醸しなるビイル（酒名）をも上
品にして味ひ美なり

第四をセノラメイゴロドと以ふ囲りに城を築立
二川の石門あり　度数側量の学校(ブロイアンドホイス)あり　此處
の宝皆木を用ゆ故に時々火災あり　千六百二十六
年　ニヲレアクウスと云者点検して人家四万家
ありといふ　千七百十二年に石屋三千軒其他は石
造りといへり　デウイッカイ　イナセ
ムスカ又子メツカス　ホロダといふ　天主法堂ありて其
二鐘大寺あり　此地に名園あり　ナリヒといふ　果
をいだす　又大鐘あり　第一の寺にありて鐘塔を造
りて掛けり　千七百一年に（元禄十四年）焼失　塔も倒れ
鐘も落けるを　今は塔ありし所の間にすゑ置けり

此鐘をおとしたる時　昔損ぜる玉中の硝子
磁器の類なる砕落たりといふ　世界第一
の洪鐘なれば諸書に見えたり
テウェル　勿尔瓦(オルガ)河源にて是旧別に前去今は
諾勿瓦的亜の府にて名高し　伯多禄(ヘトル)帝の　テウェル
サロナ　西河を鑿通して　西の方より今の黒海
北海より窩(オ)い所(ス)徳(デゼー)海に船を通ずる便を
ひらけり
ロストウ　謨斯哥烏(モスコウ)の北にあり　古き鐘の地なり
ヤレスラウ　勿尔瓦(オルガ)河岸にあり
ヒイロヲーセロ　勿尔瓦(オルガ)河の西北にあり　古は別に君

ち河りしあり今ハ諾勿尼的亜ニ属す

シュスグル 亦勿尔瓦河岸ニあり

故ニ土人多く木のミにて屋室を造る 西洋乃屋室多く石

或ハ磚にて あるハ用ふ
おほく木のミを用ゆる乎残りふ

近比百年 初めて新しく木

材を伐ることきく田畑ひらきなりゆきて交易

乃貨物ハ大麻草麻瀝青(チヤン)譜蠟(エルキヤン)蜜 ホウトアス皮

華緒類なり

西魯西亜

此地なりし二十ミ道ニ分かて所謂

謨斯可烏(モスコウ) テウエル ロストウ ヤレスラウ

ヒーロヲセロ シュスダル 縛羅得抹尔(ヲロヂメル)

以上七道中土ニあり

フスコウ ビールスキ レスコウ スモレンスコ

セヘリイ ケセルニコウ ユクライ子

以上七道西方ニあり

諾勿瓦的亜(ノホゴロド) カルカポル 杜亦拏(ドウイ)

以上三道北方ニあり

縛羅答(ヲロタウ) ニスノホコロト

以上三道東方ニあり

縛羅得抹尔勿尔瓦 オカ 西河乃間ニあり地を領

もと属ミ今謨斯可烏ニ属す タンロウミカノイ

ラとハいふ人乃領知ムスコウと七十六里地を肥沃

穀を積ること二十倍するに至る其中小蜜蜂多し

フスコウ　礼勿泥亜と堺を接す千五百四年め 永正元年 本国に属せり

ヒイルスキ　波羅泥亜乃堺に有り

レスコウ　リタウウエン乃堺に有り

スモーレンスゴ　リタウウエンに堺し年来本国波羅泥亜と此地をあらそひて数度合戦あり千六百八十六年 貞享三年 より本国に属し総府城建置ありしく

セヘリイ　亦リタウウエン乃堺に有り

ケセルニマウ　波羅泥亜乃堺に有り

ユクライ子　波羅泥亜の地なりしを一分して本国に従ふ

諸勿瓦的亜　北雪際亜に接しラルカラトが西湖乃間にわたる総督府を建前を置く

近傍の数郡を管轄せしむ

カルガホル　杜亦拿　白海に際す　諸勿瓦的亜に附属せり

杜亦拿　杜亦拿河乃白海に注く河口乃邑なり　今アルカンゲルに総督府を建つ

縛羅答　アルカンゲルに附属せり

ニスノホゴロド　此地其本茂都加河乃勿尓瓦河に会する処にあり　ワヒンと似ふ人の領所なり

廿八年石にて乃寺院和蘭トイツ王旦乃高
人居ら垣石乃塔あり今別に荒ちを立
モルドア　トンラク　西河乃間にあり
ボルル　韃靼堺にあり其地広大なり
レウン　南お韃靼に接ス地極て豊饒なり
ウラロテン　韃靼乃堺にあり
東魯西亜　此地分て七道となす所謂
メツイセン　ペトツラ　ヤレンスキ　白尓米牙
ユストエク　ウイアドスキ　ケセンミツシ
但林木多し
ベトツラ　地北海に際しワーイカツトの海に峡す

除其地質く多くは茂林にして人居まれなり
氣候極て寒く河海氷凍して稀に解けす
アルカンゲル　に附屬す
ヤレンスキ　其地多くは峻山茂林沼草を以て
賦税に充つ
白爾米牙　シベリイと壌を接す　諾斯可烏をまた
去二百三十里許海を隔て境を為し是を以て
生産多く家とこの二郡人
ユストユク　杜亦拿河岸にあり此地も亦多く茂林
あり　杜亦拿河沼岸にのみ人居あり
ウイアトスキ　カサンに附屬す

ケセルミッシ　韃靼堺にあり土人これを射き
若くハ
魯西亜(ロシヤ)蠟皮亜(ラフランド)　此地乃説ハ詳に雪際亜(スウェーデン)の下に載す
此まも白海(ワーツテゼー)乃沿岸魯西亜に属しゝ三州成
挙く皆アルカンゲル乃首告に隷す
ムレマンスコイ゚レボリイ
テルスコイ゚レボリイ
ペラモレスユイ゚レボリイ
以上欧羅巴洲に係る
魯西亜(ロシヤ)韃靼(タルタ)
此地ハ亜細亜洲乃北境をしく近时魯西亜乃呑併せし地なり
小韃靼ハ欧羅巴洲度尓格(トルコ)に属せし故に其説ハ亦度尓格乃下に詳にす　大韃靼北境乃地ハ今皆魯西亜に属す[illegible]此州〻誤めりし總称して魯西亜韃靼といふ
魯西亜呑併乃地亜細亜洲に係る者都て欧羅巴洲に在る者よりも廣大なり東西凡千六百餘里南北八百餘里其の風土も一様ならず南方乃地ハ欧羅巴(アウロハ)洲乃風土に似たるも多く頗る紀法なり其他北方および東北乃地ハこれ山林曠原にて不毛の地多し止白里(シベリ)乃條に説係乃ごとし

総て此地の廣大なる事は左の各地を従へて携ふる家屋し其内本国より縣府を建置する所に初手説し十二州の内第九以下四所也所謂

カサン　オーレンベルグ　亜私太蠟甘

止白里

此外高葛砂山北脚の地なり

加山此地を勿尓瓦河急に流り　加馬河此地の中分线なくして勿尓瓦河に入る比る河和合て曲尺の状を為す此土は人化の難き所也す然ば稍々礼節を解す地肥沃にして民物豊饒なり　旧此地は君長ありしが千五

百五十二年（天文二十二年）に魯西亜に奪はれ其後縣府を建衙署を置て衛る本地を元始め旧の加山汗と称れば総稱の地となれ又ブルガルの地は則ち度尓格の不轄なりしを其箇師线遂て今はカサンの所属也稱候

加口

加山　即ち此地の首縣にして　市街居宅頗る華麗なり勿尓瓦河より黒海に貨物を運送して度尓格と大文易を為す土人は本国の人と難も雜る所の城郭は石にて　砌築し其他の人家塞柵は皆木を用ひて　造る寺観五千余座皆石にて

を造ること千七百四十九年 寛延二年 五十一年 宝暦元年 六
十五年 明和二年 大火ありて人家悉く焼失せり 此近
地にシヨントウラヤといふ小児の学校あり
マサイスク 勿尓瓦(ウヲルカ)河岸にあり
マルメイス 加山の西にあり
サマウ サマウといふ河岸に在り 勿尓瓦(ウヲルカ)の支流
にあり
キムラ 勿尓瓦(ウヲルガ)河岸にあり
ブルカル 加馬(カマ)河乃近傍 加山乃西二十里にあり
小邑なり
ビイロイセル

シンビルスキ
セイルサン
サラトウ 皆勿尓瓦(ウヲルガ)沿岸にある小邑なり
オレンベルグ 今魯西亜より縣府を建てし地にて
旧エハ乃有なり 其地はカサンに接し加馬(カマ)河エ
ラル山勿尓瓦河乃間に在り 東北をエヒラといひ
東をバシキリといふ 其土俗は韃子のたぐひにて
勇猛なる者なり 長き白哆囉乃服を着
僧帽を頂にかけ 冬は頭に戴く 常に弓箭
を帯して馬に乗り 象係佛教及び回々教を奉
ずる者 今は魯西亜より天教を布き弘めたり

なく寺観も多く建て所々なり人家も多く
ユハ河岸に沿ふて居る獣畜を蓄ふるを
を産業とす土産は綾綴皮革杯なるに
なく多し俗女色を好みし良馬を出たるに
一萬あり 凡そ千七百三十五年 享保廿年 にて女帝アンナ
十縣府を建てて 前其職甚よく教導官職
遣して正教を立て諸処士人の傲邁なる風俗
を變じ恩かせし 紀行をなしたり

ユハ ユハ河岸にあり

ボルシンスコイ

オルセノイ 並てヤイカ河急に水柵を以て周

国乃かまえを属す

コヽガル 此地に大なる地宮あり平内乃状舎居
のなく寅山天生て珍奇なる珍奇絶景
此地に大山あり ユラルと名く多玉石瑪瑙乃属
を出す

亜私太蠟甘(アスタラカン) 地も小さき海岸の都雨瓦(カラルガ)乃河口にあり
千五百五十四年 天文廿三年 普西亜小併せられ その地
頗る其ら便なり 此地乃仙味在炭あり 伯多
禄帝(ル) レインムーセルより葡萄を移しうゑて
今く其る繁衍す 其ら西乃方其海まで家
宋なし皆沙地より 塩を産出す 大陽に曝

されバ自然と結成し全く磨練せずして光
明透徹水晶のごとく其もて價高きものは
之を寶とす
又一種の奇卉を産す此をカーブスコロイト此は
草卉と云ふ此小草を摘み家に持ちて瓶に挿む
草はなほ其深き毛を生ず其近傍の
草皆獸の噛むこと能はざる事にて其の実を割
ば赤汁ありて血の如く味甚だ好し又カコ
尔瓦河の高海に注ぐ河口にてステウル
と云ふ魚を捕る其子を加非亜尔と云ふ
魯西亜語にてイカラと云ふ支那へ販賣す

是も廣大那と交易なり一年に和蘭へ一人に付
八萬レーキスタールデン（今銀の名を用 等しく詳ならず）のイカラを賣る
事あり
亜私太蠟甘即ち此地の首府なり和尔瓦の
河口ドルコと云ふ小島にあり人居稠密にして
都城の周囲一里許多く敵楼を建て要害
堅固にして其も宏麗華美なる事
譬ふべき城門十六ヶ所あり石塁を以て
之を構へ四十六般廿二尔の地あり氣候極
熱く冷ず六七月といへども
冬は酒寒く川も凍りて

最大の河なれとも一面に氷凍堅凝して
車馬を通し常に度尔格亜尔黙
沿亜百甫西亜印度等の人此地に聚り交易
をなす所にて百貨駢集り人物輻湊し
て第一殷富の地なれハ土人是を擅にして交易
の貨物と為せり

カリセイレ 勿尔瓦河岸の山上にあり木柵を以て
城となす

カラスノイヤル

ツウルノイヤル 並に勿尔瓦河岸にあり

ヤイク ヤイク 河岸にありて専魚を以て産業とし

となし又カヒヤールを以て交易を為せり
此地ハドン勿尔瓦両大河の間にあり日ラフラ
カミシンがと以ふ小流あり一をドン河に入れ
一を勿尔瓦河に注く其間僅に二里許を
隔れり 千七百年 元禄十三年 に伯多禄帝此両河
を鑿通し ベラルスベルグの ラドガ 湖より船を
落し ウラルカハ河より 諾勿瓦的亜に渡せ
テラエイル より勿爾瓦河より
ドン河に入り夫よりアソウに至り黒海 載
渡せ公斯當丁那波 今ハ 度尓格の都の名 抵まで地中
海を過き巴尔徳峡まで 欧羅巴亜弗利加二大洲の界地中海の海口なり

諳厄里亜チーテルランドの海峡を論じて
ノヲルド海に出ツレド湾より窩ミ所徳海
に入りて再びベテルスヘルクに帰る其間迂曲
新回船路凡四千四百餘里三年を経て一周
せり 此航海の記事しより欧羅巴諸
国文字の便を得しる 古今百倍せり皆
ヘトル帝の賜ものなり

止百里

名義幅員隣界

羅甸語にシベリヤといふをシビルといふ語の轉
じたるなりシビルとは此邦の首縣の古名にして其地を

トボルスキの南の方魯西亜と阿比河の間南に二百
餘里東西百六十餘里の地を止白里と称せしなり
今は亜細亜の北方なる大韃靼大半の地を總称して
止白里といふ北は氷海に際し西は魯西亜に
接し東は直に大東洋に至り即ち亜細亜の東北
にて亜墨利加と界をなせる海峡あり南は支那
特に韃靼に壌を交ゆ東西凡一千四百餘里南北
六百餘里なりといへり 魯西亜韃靼と称せしは欧
羅巴の堺魯西亜の本国より附近の地のことなりし
が漸々に掠侵して今は此地までも悉く本国
に領属せしめられて總称して魯西亜韃

韃靼といふ

河

魯西亜本国に係りし江と河とハ既に上に詳にせり
此にてハ其所属乃地に在るものを説く

エニセイ河 一名エニセア河 阿比河乃東二百餘里に
あり 北の方氷海に注ぐ 其中飛泉九所ありて
韃靼語にてケムといふ エニセイスコイの邑より
河身甚闊大にして秋より至れハ氷凍るときハ
廣さ五百七十丈（西洋乃一丈ハ七尺ほどなり） 春夏乃間ハ舟を渡り
發する河ハ八百餘にあまる 河中に魚類極めて
多し 其味他邦乃方にまさるハ 一説にハ支那乃方を

トナ河 迂曲して遠く流るること三四百里 北の方
氷海に注ぐ 河中に巌石沙礁多くして険岨に
して渡り易からず 河口は常に氷凝りて

アナチル河 カムシカツトカ乃北に在り 聖多黙峯乃東
より大東洋に注ぐ

黒龍江 一名阿穆児 又アムウル 又サガリイン 又サガリ インと以ふ
其河口は東乃方にサガリイン島あり 遠流八百
餘里 魚類多く川とも多し 舟を通ずべし

風土

此國乃地 廣大なれハ 気候も一様ならず 南
乃方ハ 西蕃等乃地 頗る肥沃にして 北の方

及ひ東北の方ハ多く峻山曠原にて磽确不毛なり
亦果実も産せす故に土人ハ只お魚猟獵のミを専
業とす次北方ハ地寒極めて酷寒にして一歳の内
多くハ冬時寒候にして河水常に氷り地上ニ積
雪ハつねに冬の気候をなせしの間なり夏時に至て
雪消して地上乃泥土二尺餘ならさりき雷なる事
まれなり多く材木を産すされとも極北の方ハ
薪榛叢雑なるのみにて猶ほ喬木なし南地方ハ
高産もつとも寒冷なり牛馬羊野羊等あり又諸
穀を産す年毎に他方の諸州に轉送する事の外
野獣ハ諸獣乃類甚多し皆以て食料に充川麻

野羊レーンエランツレンチイル野猪兎狼黒白熊
狐又狐乃背ニ黒き十文字なるものありサベルス
ヘルソレイエンマルテルスウェーセルナイスエーキホールニ水
牛ロッセンリエクテンビサムス麝獣等あり又多く皮
革を出す就中黒狐サベルスを此邦の名品とす
其産乃皮革ハ本国に輸しそれより欧羅巴の諸
国ニ販く價も甚貴し
此地をハ本国にても古へ罪人を此地にして死罪の
者ミハ該国にて擄にせしむ人家にも多く蓄ひしサベルス
マルテルスウェセルス等を捕しうそれまく食料
ともなせり其獣を捕ふ定めあり其前去

既に出兵援して　敵乃兵なきに強まを加へ
其地広大なれバ其の土俗おほしくす本国の人も
多く来り居る所なり　土産蜜蝋　牛脂ベールルキブラ
皮革等をもつて　支那　特立糖(ファーミ)鞋(タルタ)及び亜爾黙泥亜(アルメニア)
の人と大交易をなせり

併有

前時ハ此地を曠漠韃靼(ヲトストタルタリ)粗と称して　本国よりさへ
心をまかせたる近隣乃強勢なる国々不服従して
居たりしが　伯多禄(ペテル)帝の時に至りて　阿比河より
以東大韃靼東部乃大東洋に至るまで悉く
呑併しけるに甚だ　凡百余年前ツァール王の時より

旧乃シベリ乃地をさして本国ニ役属なしおりし先より
夫より東の方を侵掠して　其後東南モンコル（蒙古）韃子
乃地を既に支那ニ服従するに至りて　千六百八十
九年（元禄二年）に其堺に城郭を築きて国をなしそ他
の地を悉く伯多禄(ペトル)帝の時に本国に従ひしめり
又千七百二十五年（享保十年）船司加比丹ベリンク　スパーンベルグ
ツキリコウとして命じて　此地乃図を裁造らしむ
伯多禄(ペテル)帝崩じて後千七百三十年（享保十五年）女帝アンナ
の時に至りて其国路を成ぜり　夫より以来地形
の曲折も明白になりて多く国々を開き　支那
カムシカツトカ等一乃往来の路程も詳審を得て

行路も安穏に成りしなり

分界

此部の大酋長はドボルスキの府城に居るなり次なる者をエニセイスコイとイルクツキと而近よりて分ちて三州とす

トボルスキ

エニセイスコイ

イルクツキ

各州にある数道をわかち郡縣を建て且それぞれ毎に酋師ををきて理めしむその各を給地に着きその身をとかも截せ

トボルスキ曰シベリの於国なり魯西亜第一の堺に隣なり地の大河をトボル河と以ふこれによりて其国に名付たり

トボルスキ　即ち此地の首縣なりトボル河ある河の北極四十八度十二分の地なり府城をは山上に建川止白里（シベリ）の大酋長此地に居る千五百五十年に（天文九年）建てたる城なり石にて建たる寺二ヶ所入尓馬泥亜の学校なり支那印度等ある交易の商賈等此地に会し防寇策の（防寇軍番所　カラバンシ）護送を得て往来多般に常に此処に輸湊し珍奇の貨物集まりさながらの如く此地最

殷富ならす 糧食殊ニ缺きなる人ハ産業を
勉めすして衣食乏しき事那しとなり
ラスチアケン 一種の奇人なり人物中なる猿大さ
なり子ニ名付て獣の名を以てす居所ハ隘せ
まり木枝を結ひ合せ作り樺樹皮にて覆ふ粉
猟ハ魚を事とし又なし熊サヘルの類を
捕らへ食ふなり 其魚を魚油ニ浸して是を上食
とす マレンデイルの熟血殊ニ最上として飲物とす
支那の煙草を最も好き然に人死すれハ
其財武具等を合せ葬る
チターメン又チエメーンチエラ 河岸ニ在 人四分の一を

雖子なり 此地ニヘクトコイ ウラツロの北ふ抽る
灰白色の狐を産ス 最奇貨とす皆木囲り
造りなす其私败夫傍その屍を纏ふ
チエリンスキ チエラ河岸ニあり 木柵を以て堡となす
人居三百余家
ベレソウ 阿比河岸ニ在 ワーカツトの海湾ニ係て
亦木柵を以て城を為す
カマンカコリワンスコ 并ニ加麻河岸ニ何里 此地ニ
鉄礦あり 大続を隷ス志使なり エクチエス納
山あり ウエルコウ エールチエラ 河岸ニ何り 木柵
かくぐんをなす 此地ニて 火浣布を織る

ル　都府　方言スケルコワ　コニラとなふ　此院都之
カタリ子ニベルグ　千七百二十三年（享保八年）伯多禄帝創
ミし県府なり　其後千七百三十六年ニ（元文元年）女帝カタ
リナ乃時ニいたりて繁盛せしより　此地ハ
名高き　チセツト河の地ニあたりけれハ　河水漲
り溢れて患ひを為す故ニ　東岸ニ城を
築くこれを防く　此地ニ鉄山あり　此邪ゟ
一乃鎮也て　影しく人家を聚り　常ニ数万の兵
あり　此地都里又病院学校等の有り
ウエルクヤイツカヤ　イカ河岸ニ有り　千七百三十五年
（享保二十年）ニ此地ニ其営を築く　これより七里許りの地ニ

ミ名乃磁石山あり　ヤミスケワイルチス河岸ニ
有り　千七百十七年（享保二年）保塁を築く　外部炮台
大炮十一門備り　一里許り乃所ニヤミスカヤと称ふ
湖あるし　湖中ゟ雪の如く上好の塩を出せ
此白里（こべり）中乃日用となす
カメノイヤルスカヤ　タラニツ　羚羊　野猪　鹿あり　元
ミくペトルフルクよ送る
ツラバルクルスカヤ　此地ヨツケバルと称ふ　湖あり
此邊ニて多くラツコをとり候
トムスキ　トム河の河辺河ニ沿く河口ニあり
人家一千　県府を建　酋長を置く　人数千人

なり　此所より　防寇軍を出して　支那の貨物
を漠斯可烏に致す又葛尓莫哥と互市乃
大場あり
ナレイニ　阿比河岸にあり　北極五十九度の地なり
木柵をもって成堡となす
クスチスク　トム河岸にあり　此地乃ヒイル名酒の最
上好なり又焼酎を出す　杭臭をもて食す
元川ナレイム以下乃三邑千七百二十六年
享保十一年より　トボルスキ　に属す
ハラバ　阿比イルチス両河乃間にあり　千七百九年宝永六年
に雪際亜ヒユルトハ帝に係りて其餘兵を並すに

擄掠せられ士卒ともにべりに遣して千七百二十
一年享保六年より乃間に多く此邦を併せ給ふ
エニセイ　スキ　トボルスキ乃東に在り　エニセイ河
南より北に向ひ流れて　氷海に入る故に
其地に名付く北をサモイデン　なり　千五百九
十四年文禄三年より六年まで乃間　和蘭東乃人
東北より印度地方に通ずる路を求めん
として始めて此地に至りし事あり　地は北極規
内に係りて極冷にして酒も凍る　エニセイ　ヒ
ナ河乃間に住める人物なりて殊異なり
極冷にして綾も少しく醜陋なるものいへり

す雪色黒く目長く形を鬱脹して氣を
含みて傍らに集ち其傍を脹らしなりいは獣
皮を着ル但一枚のまゝおろし身をまとふへ
婦人ハ却むし 天をおかり 又佛像を集る
ことありニカセンスとゆふなる所の南に
住ところ未だ無へ 草を葺ひたる煙
出しを附て炉を奥底へあけて附煙出し
を塞ぎて 寒綫を凌く 常に人別して臘納
獣を捕り其獣肉を食とす これ一種の
夷人なりトングミ河傍に居家ありて即ち
トングミと稱す 人物中分の大きさなる 兩足

黄ばしく葛の莫奇の人物をして鼻高く
目小形なり 小児の肉より面上に青黒の紋綫
ありて 皮を縫付て 文をなす 小児を那きて
くろしみて 號泣するなり 古くは總身に紋
の有て せしとなり 其を紅りて 工拙あ
りと云ふ人ありしに 天教を奉じ 佛を拝せぬ
ることを知らず 大抵一夫両婦 或は三四人つゝ
及ぶもの有り 居所を定めずして 縦足に
遷移し便ならしむ 性めて勇悍之
常に獣肉を喰ふ レンデイルの皮を衣とす
今皆本国より 従ひ来る所の皮革 ...

美服ヲ以テ交易ノ貨物トス
エニセイスキ　即チ此地ノ首邑ニシテ北極五十
八度ノ地ナリ　エニセイ河ニ臨ム　府城ハ千七百
三十三年（享保十八年）ニ新ニ建ル所ナリ　武庫
火薬庫アリ　土人ハ愚陋懦弱ニシテ酒ヲ好ミ
産業ヲ治ル気ナク徴発ヲ患トスルモノ多シ
マンガセア　小邑ナリ　人家百軒寺三ヶ所皮革ヲ
以テ交易ヲ為ス　北極六十六度半ニ当ル　日光
短ク夜長ノ地ニテアリ　府城ヲ　チユルカン河ニ臨ミ
チユルカンスキト云フ　大院四門アリ　千七百廿一年
トボルスキニ隷ス

カラスノイヤルスキ　エニセイ河ニ臨ミ　二百五十
家　馬牛羊ヲ畜テ交易シ　糧食ヲ得ル　地
肥沃ナレトモ其ノ人農耕ヲツトメス
イルクツキ　此地最モ広大ニシテ東ハ
直ニ大東洋ニ際ス　千六百四十四年（正保元年）本国
ニ従フ　此地ニ一種ノ夷人アリ　ブラツテンヽト云フ
アンガラ河岸ニ沿テ居ル　木枝ヲ編テ六角ニ
小屋ヲ造リテ住ム　牛馬羊ヲ畜フ　人物中
等ニテ大ニシテ衣服ハ本国ノ俗ニ似タリ
男子ハ剃髪ニシテ女子ハ辮髪ス（牛羊ヲ畜フ但一所ニ止ラス）
多一二ヶ月ナラスシテ其住ヲ
改メ又別所ニ遷移スル所アリ　又一種ヤクテンヽト云フ

あり ルナ河あるあたりに住ゐ猟を業とし サベルヲ捕
其皮を以て貨物とす 性甚猛悍強暴なり
獣肉及び蒜を食ひ又肉を何にかくもして行
事 其隠く食ふ物に葡萄酒 モルメルデーレン を嗜
む

イルクスキ　此府の首領なり 本国より奉行の
首長 此地に居る人家千餘棟ありて 大抵十
六門を設く 本国の商賈常に此地に来て
支那の貨物を貿易す 又他邦の貨物
此地より本国よりも格別に價いやしきと
土人至て懦弱にして 酒を好む

イリムスキ　イリム河岸に在り 北極五十八度の地
なり 土地甚寒境 人民殊に寡なして 極て
殷富なり 南に大湖あり バイカル湖と云ふ 多
くサベルを産す 又湖中に小島多く 而て温泉
あり 此湖中にサベルを生ずるなり

ブラツケ　アンカラ河の辺にあり 本国の流人多く来り
居る 又牛並羊以て 交易をなす

セリンギンスキ　セレンガ河の辺にあり 千六百六十六年
寛文六年 に城郭を築き 支那韃靼と疆を固む
多く倉庫五ヶ所 米穀及び器械の庫を建つ
周囲皆山にして 五穀よく流しすす

エチンスキ　ユバ河岸にあり　流れてセリンガ河に注ぐ　東南は支那の堺に接す　此地は穀多く備りて價も極ていやし

子ルレンスキ　黒龍江の岸にあり　北極五十二度の地なり　千六百八十九年（元禄二年）に城郭を築く　支那と疆を同くし　此地より北京と交禮の使節を通す

ヤクツキ　レナ河の岸にあり　北極六十一度の地なり　赤楊を以て城を築けり　此地魚蝋を用として盛之　土地田畑に乏しけれども土人は農業をなすとせす　カムシカツトカも亦此地の所轄なり

マキレンの今はオラツコイの首師に屬す

オレクミンスキ

ウエチンスキ　是もレナ河の南にあり

オコツコイ　其地頗広からず　北白里東は諸州の嶺を経て其西は氷海にあり　南はカムシカツトカ海に臨む　土人は佛教を奉ず　其首縣は北極五十九度ペテルスベルグより百十二度五十三分東にあり　此所に舟及ひ遠き船を造りカムシカツトカに渡る

ユカゲリ　氷海沿岸にあり

ツクツキ　シベリの東北隅にあり　土人等頑ら

鯨歯を樹小児の唇にはめその穴を穿ちて以ふ
オルトルスキ　カムシカツトカ乃東南にあり　此地於
本国に従属せし時　拒献せしこの年より
近隣乃諸国本国に従属するに至りて今ハ
織税を出すのみなりとぞ
コリヤカ　コレイキ　ペンシンスキ乃湾口にあり　其地荒廃し
土人常に其居所を遷移して定住乃処なし
其俗兄弟といへども猶妻をわかちて暴戻なり　人死す
れハその屍を焚く　レンデイルを多く産す年
毎に一萬二千銭貢す
ユデスキ　北極五十六度三十分ユデ河岸にあり

支那ニ境を接す
アクランスキ　ベンシン河岸にあり　北極六十三度
三十分にあり塚
アナジルスキ　東北隅アナジル河岸にあり　北極六十
六度乃地なり　此地猶いまだ全く本国に従従
せざる　其地乃広く殊に大なる半島あり　三面寒海あり
一面陸に續き地を守ふ　これをカムシカツトカと呼ふ　イルク
ツキ乃属にあり　其地に大河あり　カムシカツト
カ河といふ　北極五十六度三十分乃地より流れて
大東洋に注ぐ　故に其地に居住の所あり
日本に近く　古へ蝦夷と称せし地なり　北を止

白里を堺を構へ 又五十九度三十分乃地
ユブスタヤと以ふ小河あり 雲の流れて ペンシンス
カヤの海湾ニ注く 此處乃かたら高き瀑し
暖かなる日よりて 云中地ヲ あ流山を東の海
濱よりも 西乃海濱よりも 足を以ふ 南小
わたり 二百四十里 その南ま 鋭ニ湖ネヲルリ
スカヤロハチカと以ふ 北極五十一度三分の地之
伯多禄帝乃建りまし ペチルベルグ乃都より
百二十七度東ニあたる氐
此地も高山多し 中分乃地ニ一帯連綿して
皆山なり 高くも石山ありて 不毛乃地なり中ニ

三川乃火山あり むかしより常ニ烟り或ハ又
時ニ焔を出し 灰を飛ばす 石をアハシンスカヤ
といひ 一をチユルバシンスカヤ 一をカンシヽカツトカ
と以ふ 此山續きたし 暖かる日よりて六十里乃
外まて見ゆる 山乃脚周り 十万五十丈 八十一里四十間餘 此山年
々高く廣く 所を噴出する事 何か時ありて
多少あり 多き時ハ八十里四方まて灰を降らし
少き時も二尺餘りに及ぶ 千七百三十年 元文二年ニ
大きく燃出して 石及び積もれる乃多き所ら硝子
硝子ハ玉石乃火氣ニ依て熔化せしものなり を吹出せし事あるまで溢れ
あふれ流れて多く 海邊乃山脚より出て池をなし

那り一里許りなる小き石山に沿て流き
て海に入其の深さ四尺餘廣さ二丈餘又
沸騰しておびたゝしく勝りて害く河り又
穀を河ありて噴されは濃き烟り然起て
三四丈も騰りて所のてなまことに成て
あり温泉の水更に黒きものにて溶けて
何里くらゐ流るは没てに落なし
地震海嘯（つなみ）を為して何か火山の様にして別て
珍らしからぬ事なり
氣候は一年の内八月を多おり南緯方を
常に雪の深さ大抵一丈二三尺北の方多て

却て雪なし其の氣候も温暖にして肥饒なり
五穀を生せす但子ーブルホルトカムシカツトカ
多畑をも作らすなり雪ありて至つて稀なり
風波は常にありて甚だよしきなり燈火は
鯨をは捕りて其内へ入るゝ價なり土人皮
革及ひ魚獸類にて大に富み殊なるものあり
之来カムシカツトカを蒙古より衆を極し
地なり黒龍江の邊より移り来る
其人物は毛太なり寸多く赤黒く髪の毛
黒くしてあり面濶く鼻高く目深く
眉薄し並て腹廣き肩手脚を成て

又皆海河の魚を捕て食ふ其飲食は極て粗し　蒸さぬ魚肉の如くなるを着る其住居は清むることもせす土中に家を掘り其深さ四五尺に埋てその上に柱を四本立て庵の形に造り土或は草を以て覆ひ上に四角なる穴を穿ちて煙出しの明りとなし出入するにも此穴よりす　魚猟獣猟を業とし其衣服も獣皮を用ひ家具も石或は鯨の骨獣の角等を以て作り木或は石を用ひて[illegible]のことくなしたり用ゐる所なり　魯西亜より来るものを貯へてその外の

食もなし又[illegible]車ともなきなり　犬を多く養て旅行の時は雪車を索かするなり　妻をもつものは二人三人持つものあり容貌好きを常に集むる風俗なり[illegible]其人を殺し其[illegible]を工人と云ふなり　此の本国に服従して後千七百四十一年 寛保元年 より女帝の命にて遣して天主教を布すへき者を遣し其人を教導せしむるにより日々月々に教化も行き渡りもしてあれは遠からす皆善良の民となるへし

に一種の夷人ありクリルスといふカムシカツ
ト南岸近傍の島々に住む大抵カムシカツ
トの人物に同し但その総身に毛を生するを
異なりとす女子は唇を黒くし男子は只唇
の邊中而己を黒くせり男女とも耳に銀環
を掛帯より纏ひたる衣乃間并袖乃模様を
いずれもみな同じ衣服ともにカムシ
カツトカに同し飲食等を詳にて奇異なる
方なり魚肉及ひ海獣の肉を食物とす
女夫をは葬家罷に行ふ祭祈所の神を
イニコウルといふ是を祭るに木綫幣を制して

ものかけて幣乃ことく（蝦夷にてイナヲといふ）し獣をころ
殺し皮をはきとりて備へ祭る肉をは飲用と
す人死すれは冬は雪の中に埋め其みを
土中に葬る
魯西亜の此地を得たるは千六百九十八年に（元禄十一年）アタラッフ一軍を師ひコーサツケンユカゲ
りおもひコレーキより此地に至り土人を大
半服従せしめたり千七百年（元禄十三年）の七月
に本国に帰るその得たる所はサベルの皮三千二
百張ベーフル（ラッコなるべし）七十七獺四灰白毛の狐
皮十張赤狐九十一を帝に献し自得る所

サベル皮四百張あり　その後千七百十五年
正徳五年に再ひ軍勢を起しペンシンスユイ乃
海湾より　カムシカツトカに渡り其地を占論
近傍乃諸島まても従ふるか猶千七
百三十年享保十五年土人魯西亜に叛ひて敵對
せしか程なく静謐ならすして今に至るまても
無事に治りて居るなり　賦税として毎年
人ことにサベルベーフル狐右三品乃皮何なりとも
一張つゝ出さしむるなり
一をボルセレツカと呼ふ　ボルスカヤと呼ふ大河
乃側にありペンシンスカヤ乃海湾を去る

三十三ウエルステン一ウエルステン三百五十丈すなはち　城乃大さ
四方四十九丈オコツコイ通商乃舶先此地
に来り集る所にして交易繁昌なる地なり
二をヲツプルホルトカムシカツトカと呼ふ五ヶ所の
内此城を川をもて右しカムシカツトカ河源を去
ること六十九ウエルステン、ホルスケレツコイ乃北二百
四十ウエルステンにあり倉廩武庫を設く
三をチーテルホルトカムシカツトカと呼ふヲツプル
ホルト乃即位三百九十ウエルステンカムシカツト
河口を去ること三十ウエルステン堡乃広さ方
二十八丈周りに木柵を構ふ

四をアワツカと以ふ千七百四十年（元文五年）ニ建川
アワツカ河乃港口ニ在り
五をデキルと以ふ新ニ建てし城ありデキル
河の傍ニあり
此地乃属島極めて多し著き者を左ニ挙く
クルリス　諸島カムシカツトカ乃南岸ニ起りて
西南乃方へ連綿して散在す著名なる者二
十二島その積りて日本諸島と称す者カムシ
カツトカニ附近乃島々ハ昔西亜ニ従へとも
遠く離れて在る島々ハ今尚日本ニ属して理る
と云ふ所あり其地地震多く又火山を

日本と交易盛ニす又日本ニ傍の島
島ニ一種乃毒草を生す其根乃さ大黄の
如く色黄ニして泊夫藍色乃如し矢ニ塗
りて獣を毒すユタンベと以ふ島ニてもフラン
トキツテル（文の誤）を以て布を織り日本人と木綿
換へ易り交易す
又一大島あり其の南乃端を松前と以ふ往昔
より日本ニ城郭縣邑を建ておけり又カムシ
カツトカより乃海路ニ[illegible]ナミリ島ありユルプ
以下此三島日本乃人を以て[illegible]と称す
ペリングス島　大東洋乃内ニ在りカムシカツトカ

河口を去る事一六十餘里なり　千七百四十一年
寛保元年舶司加比丹ヘリングス始て此地に至り
其年八月此地に卒す故に其名を以て此地
に名けて廣さ四十五里許なるを二十ウエルステ
に皆黒林堅緻なる石あり地震多し嶋の際
日に此嶋より北に當り雪山あるを遠くみえ所あ
に四百九十丈足北亜墨利加(ノルトアメリカ)の山なるを見し
チラメデス島　北極六十七度の地なり
聖老楞祖(シントラウレンス)島　亜細亜の東北隅に何れの際　千七百
二十八年(享保十三年)にベリングス始て此地に至る
號く人將きなるの後再び其地に到らず次

ベリングスが多くの島々を開きたるはのちなり
北亜墨利加の西岸は北極六十度の地よりつゞき
洋中は其號ツキルコウと称する者なる北亜墨利
加の西辺六十五度の地を以て又千七百
六十三年(宝暦十三年)吾国より船を發し氷海を
越てツクヽツキ北なる緯七十四度の地を歴て
又南に向ひ一の海峡を經る是北亜墨利加の
西界亜細亜の東にあたるの海峡なり　又六十四度
の海上にて多くの島々を寄き得てあつまる
穫りて皮革を製して交易をなさしむ　べり
ングス島より總司を遣ていたれる所を定めしむ

其島々を總称して アルヽヽト諸島といふ
北亞墨利加に屬せし地なり
此海峡を得てより後ハ常に此海路を往来
する事明り 此所ハ西大洋の間僅かに六十里
許隔て 其間に多く島ありて故大船ハ渡るべからず
日亞墨利加の人も今ハ歐羅巴の教化を受昔日
の殊更不倫の俗ハあらざれハ小船纔に由て
さきにみ怖るへき事もなかりしより上に説所く
近来大難艱止白里及び東方諸国に通ずる
新海路を記して 魯西亞の北海より
船を發し 止白里海岸に沿て遠く カムシカツトカ

にいたり初て 新增白蠟(ネイセンブラ)の島なる事を明白に
知りけり 但此海路を開きし報険なり氣候極め
て寒く常に層氷をなせハ又潮勢極て速く是
暴風変乱甚しけれハ全船盡粉となる只海路
而已ならす 止白里の續海の地を時々風濤
の為に小害を受る事 ありといふ
高葛沙(コウカス)山脚の地を 北ハ黒海と裏海口の間とし
亞細亞(アジヤ)歐羅巴(エウロパ)分界の所にあり トン河に接し
熱阿尔入亞(セフルヒア)に係る 地球方形にして縦横二百
餘里 大小難艱より なる衆を植し 地なり 千
七百二十二年 享保七年 伯多禄(ヘトル)帝 此地を保ちて

止尓加止卯　幅員百二十　餘里一分ハ魯西亜ニ
從ひ一分ハ契利斯ニ属す
土俗ハ田猟畜耕を業とし　又畜産を業ニ
此地乃婦人極めて美麗ニして　常ニ新様の
衣裳を製し粧ひ飾る事甲にして流行を奉宗
且又良馬を産す其人も健強なり　價も又
高し

クバン　アリウ乃　西隅ニ在り　本度雷格乃所属ニ
て魯西亜ニて是を領するなり　伯多禄帝
乃時より　女帝アナ乃時千七百三十年ニ　享保十五年
至りて強く　服従せしなり

カハルチ子ン　亜私太蠟甘乃　近傍ニ在り　大小二部
ニ分つ
タデスタン　此ハ海岸ニ在り　百尓西亜と壌を接し
土人甚だ強悍を奉宗す　此地ハ　本国ト百尓西
亜と大交易場なり　其乃貨物を北より海より
私乃みて　転輸するなり

魯西亜人物

其人長大ニして　容儀端正なり　その性　恭敬和順
ニして　忠ある勇壮果敢事ニ臨んて　動ずるに
飲食ハ　蕪菁　青菜　芦葱胡瓜魚蝦乃属　焼酎を
米乃飲ミ物とす　年暦乃屋宴　野刻又温湯ニ

浴し幼弱乃ものハおりせし絶て食後清でしむ
常人も烟草を喫するに巻烟を用ひ軍人ハ烟草
を嚼むものハ焼酎及び葡萄酒を嗜む
常ニ閑居事なきを好まず他邦に往て事を執
しむる者の如きも篤実に謹む事多く
変らざるハこの国の習ひ用ふ六十餘年其邦を
偏歴して稽古する者あり其事を為さすんバ
止まず能く其事を成渉る者ハそのつとめを重く
挙用ひられし事なり
服色ハ入爾馬泥亜（ゼルマニヤ）拂郎察（フランス）の製を用ふ最華美
整楚なり常人の服も羅布を用ゆ

賤人も鬚を剃らず
家毎に浴湯を設く
行路も互に禮儀を守るなり
居室器用ハ多く麁末なり但官室等のものハ詳ならず
言語ハスラホニヤ乃語より轉じたるなり今ハ尼力
西亜語を雜へ用ふ
文字ハ二十四字あり
従来魯西亜（ロシヤ）に航海乃事なかりしなり伯多禄（ペテル）帝
の時より始めて航海の法を調煉せしめ其術に
委しく其後その後女帝アンナの時ニ至りて水
戦陸戦ともに其法に熟煉せしハ度番格韃靼

等乃諸戦ニ那屋交戦し黒海サバチセ湾の
大戦を経てより其法を得たらしなり此後も
千七百三十九年に（元文四年）凱旋せしと雖再ひ此海ニ
吾国乃船をハ出さしといひしと那り
女帝アナ朝なる時ニ種々制令を定められし女帝
エリサベトの時までに国風を経て古俗を易へて
新政を布きらし所あるか風俗も格別善良に
移り当今女帝カタリナまでに漸くに此地も繁
盛り教化も日に益隆んなり
古ハ婦人の彼衣おもし事所なりし伯多禄帝
入尓馬尼亜の彼を用ひ其風俗を学ばしむ但

白粉を用ひす西色乃赤粧を（紅をぬりて粧ひ来りし）を以て美
ならしん

教法

尼力亜亜乃教法を奉して千五百七年に（永正四年）尼力
西亜乃教化を迎へて護斯可烏に殿堂を建川
小児生るを法くに法に遅馬人乃如し但其子性
以上より水戯灌くる全身我水ニ浸さるを要なり
七八年出経人乃他教を捨て名を改めて
先新教師乃法昔を聴くる四十二日にて法教の教
法を改めるの時よ老人をやりしおふして後我向
七唾を吐きる那り是古き教法を捨て書法

出来しとす〔此條詳ならす読て解する難し〕その後本國乃使を派せ
頭に油をぬり蠟燭を手に持たしむこれより
七日乃間自己乃心魂を祈り第八日に水に浴し
て名を改ふるなり是より伯多禄（ペテル）帝より其法を
改めて天教を奉崇せしより以来又其
法を易ふる所なし〔以下一向に解し難ければ略す〕

習業

算数書法を学ぶ事なりとす伯多禄帝乃
時欧羅巴諸國より有名乃学士を迎へ譜厄斯
可烏に学校を建て生徒を教導せしむ其名
國乃言語なりとなへ年少のものには先度數乃学

を為しむ行その学業乃永久ならむるも
事とせりて キタウ又ペテルスベルグに学校を
建るに書肆を設け諸國乃典籍を集め大
道に合し人心に益ある書をは悉く國語に
譯して刊行せしむ又千七百二十四年〔享保九年〕正月
に入爾馬泥亜（ゼルマニヤ）雪際亜（スウヱテン）払郎察（フランス）より幣禮を厚ふ
して有名乃師傅をむかへ書庫乃書二千部を
出してその内より採摭して百藝窮理乃書を編せ
しめ又百工乃伝院を設け其業を習はしめんとせ
企ありしか いまた工をおへさる内翌千七百二十五年〔享保十年〕
崩し玉ふ女帝カタリナ即位ありて其志しを

太抵本邦乃金一両位にあたる

於千七百二十六年（享保十一年）学校悉く築きあげその
壮麗いふばかりなし 一歳の費用二万四千九百十
二ルウベルス（金銭の名目なり前に注せり）あり すべて其学四科を分つ
所謂星学史書学窮理学并数学なり 年毎に
師儒名ある生徒を考試して 優なる者にはこれを
賞賜す 又貧しき者には奉禄又百工の技院にはいる（これぞ）諸般
の文字銭諸種の典籍を刷印し 并に書を綴る事を
学ばしむ 又玉工石工錠工（ひきだしの）其他百工職を習はしむ
費用年毎に二万八千三百八十六ルウベルスなり
両学校の費用合せて五万三千二百九十八ル
ウベルスなり

又ペテルスベルグの学校にも 教科（教法を主とする者）治科
（政事を習ふことを主とす）医科（疾病を療するを主とす）道科（教化を主とす）の四科
をわかち日夜に励精研究せしむ 於千七百四十
二年に（寛保二年）其述作の書目を点視するに医科
道科の書一万四千百八十七巻 国事を記し
たる書二百八十二巻あり とぞ 又千七百十四年
に（正徳四年）宝庫をまうけ天産人巧の奇品異貨
を収むるに草木虫魚各数百品あり 又始は伯
多禄帝千六百九十八年（元禄十一年）より和蘭の商人より
購して買得たるなり 其後千七百十六年に（享保元年）
アルベルトスサバなる者禽獣魚蛇蝶の属金石

の鞍をタンツヒフ（コロイセンシク地）より発見れたる千他諸国の金銀銭及ひ測量窮理の器具なと備へたる宝蔵もありし又千七百三十二年に（享保十七年）伯多禄帝の肖像を造りてビユルトハの戦ひに用ひし衣甲を着せしめこれを宝庫におさむその後帝は四方の奇品名品をあつめしめ其外今に至りては海内の枝頭奇なる珍しき物なれは悉く收貯せさるは無りし

政治

此條官名未詳ならさる所解し難し只その一二を挙く他を追考すへし

古魯西亜の君長たるホルスト（将軍）あり中に後ゴロトトホルスト（大将軍）となる者まてはカサール王となるあり

伯多禄帝はしめて帝号を称す蓋千七百二十一年（享保六年）の事なりき度爾格（トルコ）と帝号を争ひしか千七百四十一年（寛保元年）に至り魯西亜に帰しけり当今女帝カタリナは千七百四十四年（延享元年）の七月五日に降誕ありて千七百六十二年（宝暦十二年）に即位なり

兵制

魯西亜帝随身の兵常に三十萬あり千七百三十一年（享保十六年）女帝アナペテルスベルグにて操練場を設け多く軍師を撰ひて操練せしむ又伯多禄帝富に所徳海（ヲストセー）に七十二の戦艦を造りて水軍

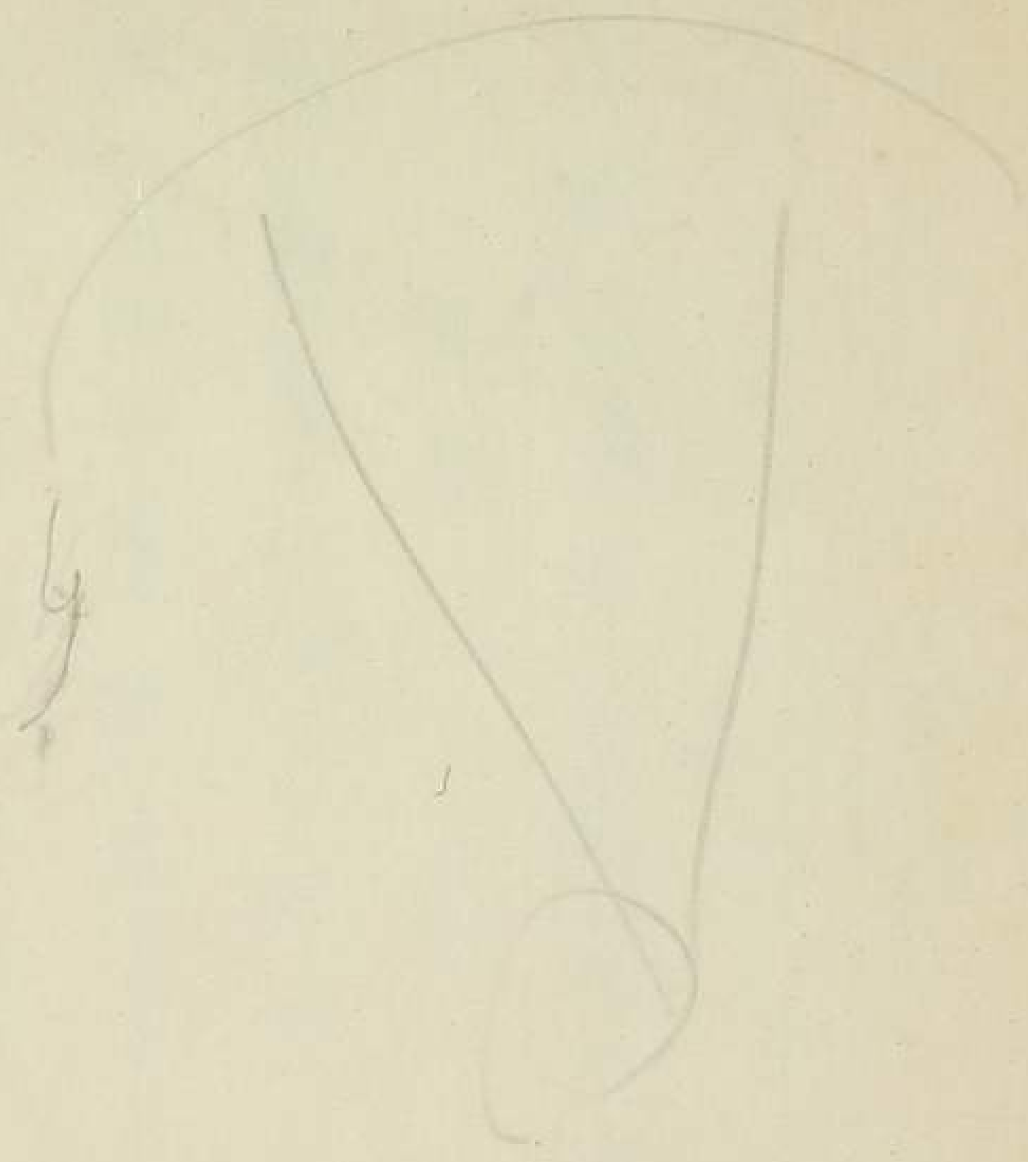
を准備す第一等の船九隻毎船軍卒五百鳥
銃六十第二等の船二十隻毎船軍士三百六十
鳥銃五十第三等の船五隻毎船軍士二百五
十銃四十一第四等の船十九隻毎船軍士一
百八十銃三十四第五等の船九隻毎船軍士七
十二銃二十四火船四隻快船十八隻捕盗船百隻
合して軍士等八千鳥銃二千五百これを一
隊とす
本国より船を造る事を為すにはペテルスベル
グ及ひアルカンゲルに多く船匠を聚め夥敷
船を造りしも女帝カタリナの時軍船一百四

十隻を造り軍士三萬人を乗す又千七百五十
六年宝暦六年は軍船二十四隻快船ハヤフネ七隻駛船三隻
走舸四隻を造り水軍一万を操し仍今又
ペテルスベルグにて軍船百余艘を造り備へり
といふ
常に二千万ルウベルスを以て軍事に備へ一分は
路用に充て一分は糧食ケステムペルデバヒール
府蔵の物ケイズルレイキトメイ子ン未詳に充て
一分を銕六ツトアス灰汁の類未詳大黄瀝青魚油等の
價に充つ
交易

此邦もつとも交易を事とす凡その貨物を
他邦よりおくり来て本国の貨物と交換し他邦
の風土を考て其土の物産につき不足を撰
らんでおくり致すを要とす
千七百五十六年（宝暦六年）交易なして得る所の
金高三百五十三万六百十四ルーペルスなりと
欧羅巴諸国本国にて互市する者請人利要を
第一とす其交易の法は他邦に異なり
其次なるは子ーデルランド・ハンセステーデン（弟那馬尔加の地）
交易をも又繁昌なりとす其互市の場をは
テルスベルゲを最とす

支那の交易是より夥しき事なり貨物を送る
防寇軍を以て又カラデ契利牟百爾西亜等の
互市も利を得る事広大なり多くは雪車を以て
貨物を転送す

寛政辛丑孟春初六創譯十七日卒業



I